北西尾根から摩利支天山へ

昨年果たせなかった宿願を、遂に手中にした。
このルートの為に大切に取り置いた摩利支天山への登頂を。

このラインは、沢だけでなく積雪期の登路にも関心を向け出した、折しも山には出掛けられず悶々としていた5年程前に立案したものと記憶する。
温泉口から稜線へ無理なくシュッと伸びるこの尾根の先には摩利支天山2959.2mがある。
昨年、遂に実践する段になって調べてみたところ何と、ヤマレコ中に一件の記録があった。abey と名乗る方が、2013年4月に単独で登っておられた。

濁河温泉からの登路は現在「小坂口」から飛騨頂上へと採られているが、御嶽剣ヶ峰へは今回辿ったラインの方が余程理に適っている。
それが証拠に、かつてはここに山頂へ至るルートが存在したという。
こんな自然発生的な山行を単独で行うabey氏の存在に、山の世界もまだまだ捨てたものではないと思える。

深田久弥氏に言われるまでもなく御嶽は一王国を成しており、最高峰「剣ヶ峰」をはじめとして「継母岳」「継子岳」そして今回登った「摩利支天山」がある。他に「飛騨頂上」に「王滝頂上」まであるが「開田頂上」についてはもうそこまで知らんがな。
「剣ヶ峰」は2001年に単身兵衛谷から登路を得た。
「継母岳」へは2003年3月に米山氏との山行で椹谷山から上俵山、Ⅲ峰Ⅱ峰を経てのⅠ峰継母岳へ登った。
「継子岳」へは昨年2013年4月に本計画が寡雪で頓挫した代替で、登山道小坂口ルートに白い道を採って「飛騨頂上」と合わせて立った。
「王滝頂上」「王滝奥ノ院」へは赤川地獄谷からの終点に、と未だ取り置く。
で、今回が「摩利支天山」の話である。

一宮から車を出して頂いたコザエモン氏とは初めての山行で、氏は当初から計画の石氏の山仲間で計3名の山行となった。スキーをよくするお二人との技術差は明らか、足を引っ張らないようにだけ留意した。3時にお迎えあったものの、私の靴忘れが発覚して取りに戻る一幕アリ。325発、雪残る御嶽パノラマラインを走る頃には御嶽の左手より日が昇る。本日採るラインが一目瞭然、そう「アレヲノボルノダ」。
寡雪だった昨年と同じ駐車場には一台の尾張小牧ナンバー黒666が居たのみ、ただ周辺様相があまりに違う。もう既にここからスキーの領域で、シールを付けてスキー登山の始まりだ。709発、−9℃。
橋を渡ってすぐの神社の鳥居からダイレクトに、の思いあったが取付くには傾斜がまま有って登山道を暫く辿って尾根に取付いた。
針葉樹林の尾根は登行に快調な傾斜で、枯れ木も多くイグルー建造して酔っ払うとイイかもしれない。前出のabey 氏の記録には稚樹が登行の邪魔をする記述があったが、ルートの採り方次第で快調にも不快調にも成り得る。部分的にソレはあったものの、雪さえあれば極めて登行向きの快適尾根といえよう。北海道に在ったらまずもってメジャールートになっているはずだ。

山スキーを履いて登るのは何と！2004 年の南アは悪沢岳〜赤石岳〜聖岳以来か？いや、その山行でも前段の塩見岳山行でもほぼ履いていない。あいやいやいや、2003年4月の白山は大門山〜大笠岳〜笈ヶ岳〜三方岩岳

以来、その前月 3 月に上述の継母山行だったので、14 年振りに履いたことになる。よくもまぁ、、、、。予想した通りに樹林限界を越えた頃には股関節が痛み出し、両氏に付いていくのが辛くなる。
北西尾根の登行は南を向く為に太陽が肌を容赦なく焼き、低温で強くも無い風が耳を痛める。

机上では尾根状の登路を想像したが、山スキーを活用する我々の場合は先頭を行く石氏がためらうことなく草木谷右俣源頭部の雪斜面をトラバースしてゆく。落ちはしないだろうものの、一たび滑り落ちればリカバリーが厄介そうで慎重に通過する部分もある。両氏の目にはスキー滑降適地としての斜面に映るようだが関心ない私にはとっとと通過してしまいたい領域でしかない。好きな方には魅惑の広大斜面、私の滑降部分はハナエちゃんにでも熨斗付けてあげてしまいたい。ジグを切って登行を続ける。雲一つない空は変わらず蒼い。ライチョウの足跡を追ってもみる。
凡そ 2920m地点の稜線に出ると懐かしの継母岳が至近にある。これまで敢えて時計を見てこなかったがここで 12 時半、結構時間が押している。ここにシーデポしてアイゼンストックで山頂を目指す。あれ程登れる石氏が岩場を警戒して迂回ルートを採りたがるのは、きっと登れない私への配慮有っての事だらう。三角点ある 2959.2mへは下り気味に廻り込んで雪面を辿る。急傾斜を喘登して絶頂へ。
狭い山頂は感慨に耽る場所にない、時間も押している。とっととお暇してバックステップで下山を開始した。

シーデポ地以降両氏は華麗に、私は無様に滑降してどんどん高度を落とす。コザエモン氏と共に草臥れた私はノロノロと下界を目指し、駐車場着が 1645。無事に下りて来られた安堵がただ大きい。

帰途も寄った大平御嶽展望台からは、上って降りてきたラインが夕照に映えて美しく見えた。また、山塊右端に見える白い魅惑的ラインが正に 14 年前に辿った椹谷山から継母に至るソレだった。饅頭山から白線辿ってトンガリピークまでの行程、如何にも格好が良い。
「今日の滑降ラインが見えている！」目の聡いコザエモン氏が仰り目を凝らすと確かに見える。改めて撮った望遠写真で確認すると、ちゃんと映って見えた。

翌朝、出社時に白い御嶽を遠望し「アレヲノボッタノダ」と思えた。

今回は数日前の降雪で多少のラッセルが有り時間を吸われた半面、そのお蔭でスキーで稜線部まで登行できたことが成功のカギだった。
加えて、私の靴忘れにて取りに戻ったタイムロスも、山行に時間的緊張感という華を添えた？　スミマセン。

天候にも恵まれまた、力量ある同行者に牽引されて自身余裕無い中で到達した山頂で、何かが弾けた気もしたけれど単に気のせいだったかも知れない。
お二人には感謝したい。コザエモンさんに対しては、超早朝から帰宅の最後まで運転誠に御苦労様でした。先だっての栃木両親の来岐で前夜まで睡眠不足が続いた私は、迂闊にも意識を保てない帰路だった。

今年度も幸先よくまた、華々しく始まった。

≪タイム≫松宅(300=325)飛騨小坂(515)駐車場(620/700)-(コンタ 2050m；815)(6.5h)-摩利支天山頂 1330-(3.5h)-駐車場下山(1645/1715)帰宅(2045)

【2017.4.3 松原記】